

より広い社会貢献を

2026年度から共学化

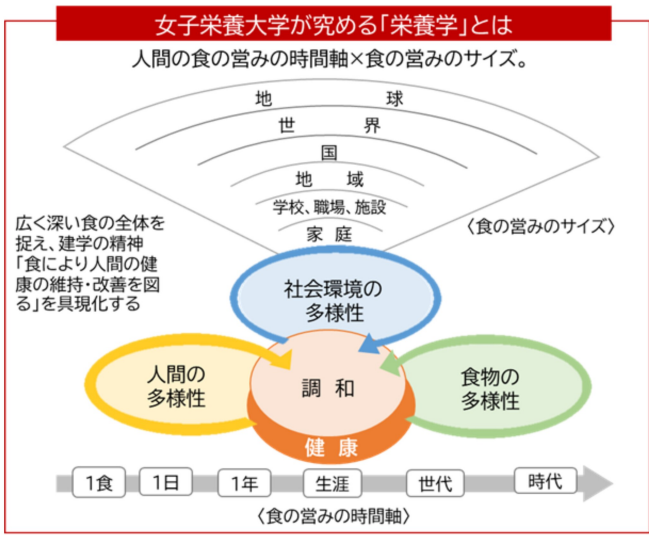
女子栄養大学に取材



「ライフステージ栄養・食事管理実習」では、栄養状態の改善につながる食事のあり方を実践的に学び、献立の調理・供食を実習（提供）

10月7日、女子栄養大学の広報部部長・河野美穂さん、広報部学園広報課・古海大輔さんに取材した。同大学は2026年4月から大学を「男女共学化」とすると発表した。あわせて短期大学部も同年度に共学化し、共学校にふさわしい名称へ変更する。食の総合学園として100周年に向けた新たな歩みを進めていくとしている。

9月4日、女子栄養大学・女子栄養大学短期大学部は、2026年度から男女共学とし、共学にふさわしい名称へ変更し、新たな歩みを進めていくための準備を始めること発表した。同大学は昨年、



学園創立90周年を迎えた。すでに大学院、専門学校はともに共学になっている。これまでの伝統と実績を糧に、食の未来を見据え、食の総合学園として次なる100周年に向けた新たな施策の一つとして共学化が決定された。

今回の男女共学化を決定した理由について、河野さんは「多様化へのチャレンジと社会への貢献」を挙げた。「今の日本の課題を解決できるのは、多様な視点や柔軟なアイデアを持つ人材だ。そういった人材が栄養学を学ぶためには、『女子だけ』という窓口ではなく、性別を問わず、栄養学を学

共学化を発表した際の学内外からの反応を「多様な人材を育成しているからこそ共学化について

今まで通りの学びと生活を

共学化を行って栄養学での社会貢献をより広い範囲で行えるようにした。河野さんは共学化を発表した後の広報活動で意識したことを「やはり、共学化だけが一人歩きするのではなく、あくまで



「100年後も栄養学を学び続けられ、日本の栄養学を牽引していかれることを目指す学校」としている。河野さん（上）古海さん（左）女子栄養大学（10月7日）

ては概算賛同を得ている」と話す。だが、共学化を発表してからいたいたのは賛同の声だけではなく、反対の声もあったとのことだ。「女子大だから安心して勉学に打ち込むことができるや、長い歴史と伝統ある、女子教育を継続すべきなどという意見も少数であったが

見受けられた。だが、少数だからといってどうこうではなく、その意見は大学への愛着や誇りを保持しているからこそだと思ふため、共学化しても今まで通りに学べるように維持していくことができれば、学内で引き続き検討していきたい」

よる大学生生活の変化について「男性の学生が増えるため、キャンパス内の雰囲気は変わってくると思う。しかし、大学生活については今まで通り過ごせる配慮を行う。共学化に伴って、施設の整備やサークル活動の運営についても対応をしながらはならない」と今後の方

針を話した。最後に、高校生に向けて言葉をもらった。河野さんは「食に関する疑問やアイデアがあったら教えてほしい」。古海さんは「栄養学や食品研究に興味を持ってほしい。そして、いろんな学問について調べてほしい」（小島・大下・中村）